

販売終了図録 配布可能

番号	展覧会名	発行日	展覧会内容	体裁
M1	「戯曲と演劇」	昭和63年4月	自ら戯曲作家を認め、多くの作品を発表した実篤の戯曲作品にスポットを当て、その魅力を紹介するとともに、それらの上演資料を集め、明治・大正の新劇運動盛んなりし時代から現代まで、どのようにとらえられ演じられてきたかを検証する。巻末に上演記録を収録(※小学館版全集の収録の原型)。	本文14ページ／ 白黒14ページ
M2	「新しき村七十年の歩み」	昭和63年10月	大正7年に実篤が人間らしい生き方を求めて提唱した「新しき村」の70年の歩みをたどり、実篤と会員達が求めた「人間らしく生きること」の形を探る。巻末に新しき村略年表を収録。	本文24ページ／ 白黒24ページ、
M3	「中川一政と武者小路実篤」	平成元年4月	日本洋画壇の巨匠・中川一政は、『白樺』時代から生涯実篤と親交があった。それぞれの書画、互いを語った著作、交わされた書簡などから、二人の出会いから晩年に至る交流をたどり、また中川一政の視点から実篤の人間像を探る。	本文14ページ／ 白黒10ページ、 カラー4ページ
M4	「白樺の文学～『白樺』創刊から80年」	平成2年4月	明治43年に創刊され、大正文学の新しい流れを生み出した雑誌『白樺』が創刊から80周年を迎えるのを記念して開催。多岐にわたる活動のうち、文学活動を中心に、創刊までの歩みと文学史上の位置づけを検証。併せて同人それぞれの代表作と人物像、生涯にわたる交流を紹介。	本文34ページ／ 白黒34ページ
M5	「白樺の美術～『白樺』創刊から80年」	平成2年10月	『白樺』の創刊80周年を記念して、多岐にわたる活動のうち、美術をテーマに、白樺派に贈られたロダンの彫刻や、美術館のために収集したセザンヌ「風景」、また岸田劉生、梅原龍三郎らゆかりの画家の作品を集め、『白樺』が誌上や展覧会で繰り広げた美術活動とその影響を紹介。	本文38ページ／ 白黒25ページ、 カラー13ページ

M6	「一筋の道～実篤の文学世界」	平成3年6月	30年ぶりに刊行された「実篤全集」(小学館版)の完結を記念して、実篤文学を総覧する。年代を追って、代表作を紹介。図録巻頭に前週編集委員を務めた評論家・本多秋五氏が「夢見る人」を寄せる。実篤主宰雑誌年表を掲載(※記念館図録掲載の原型)。	本文22ページ／ 白黒22ページ
M7	「描かれた実篤像」	平成6年5月	資料館の増築開館を記念して、椿貞雄・堅山南風・リーチらの絵画、高田博厚らの彫刻、田沼武能・林忠彦らの写真、白樺同人から家族まで様々な人の文章などに描かれた実篤像を集め、遠近さまざまな関係にあった作者それぞれの目を通して、人間・武者小路実篤を立体的にとらえる。	本文22ページ／ 白黒17ページ、 カラー5枚
M8	「画道三昧～新しき村美術館所蔵品より」	平成6年10月	埼玉にある新しき村美術館が所蔵する実篤作品約300点には、実篤が創立祭や自らの誕生日に制作した書画が多い。実篤の精神史をたどることのできるこれらの書画から優品と、新たに確認された原稿などを紹介。	本文18ページ／ 白黒14ページ、 カラー4ページ
M9	「第二の誕生～岸田劉生と実篤」	平成7年10月	日本の近代洋画を代表する画家・岸田劉生は、実篤との出会いを「第二の誕生」と語る。明治末年に出会い、その後の制作や思想にも大きく影響を与えた運命的な出会いと交友を、作品と書簡等から検証する。	本文26ページ／ 白黒18ページ、 カラー8ページ
M10	「美を求めて～白樺同人が愛した美術」	平成8年10月	白樺同人のうち、志賀直哉、柳宗悦、児島喜久雄、長与善郎、実篤、おのおのの収集美術品、作品制作、美術研究について、作品と関連資料を紹介し、彼らが求めた美の世界、美意識を探る。	本文22ページ／ 白黒15ページ、 カラー7ページ

M11	「沈黙の世界～実篤と画家たちとの交友」	平成9年4月	「文学は言葉の世界だが、画は沈黙の世界だ」と語った実篤。梅原龍三郎、中川一政、林武、熊谷守一らとの交友を示す資料とゆかりの作品から、実篤の好みと美術に対する姿勢を明らかにすることを試みる。	本文22ページ／ 白黒12ページ、 カラー10ページ
M12	「書信往来～志賀直哉との60年」	平成9年10月	武者小路実篤と志賀直哉の交友は、学習院の学生時代から生涯続き、60年余に及ぶ。その間に交わされた500通にも上る書簡から、最初期のかしこまった文面、絶交の危機をはらんだ応酬、互いへの批評から、最晩年の健康を気遣うものまで、そこに記された二人の深い信頼と友情を読み解く。	本文22ページ／ 白黒22ページ
M13	「神奈川近代文学館所蔵 中川孝収集 実篤文庫展」	平成10年4月	新しき村会員の故・中川孝氏は生涯にわたって実篤に関する資料の収集に情熱を注ぎ、その成果に対して実篤自ら「実篤文庫」と名付け、他の会員たちもこれに協力した。これらは貴重な資料群として今も研究や全集の編集に寄与している。実篤に関するあらゆるものを集めようとした「実篤文庫」の全容を紹介し、あらためて実篤の仕事の全体像を見直す。	本文22ページ／ 白黒18ページ、 カラー4ページ
M14	「絵皿・看板・包装紙～街にあふれた実篤展」	平成11年4月	武者小路実篤の書画は、色紙はもとより陶器やカレンダー、マッチ箱、風呂敷、包装紙や看板等々、かつて様々な形で街に溢れていた。こうした複製品を特集し、それぞれの時代にどの様につくられ、受け入れられ、また実篤の書画に何が求められてきたかを考える。	本文18ページ／ 白黒6ページ、 カラー12ページ

M15	「武者小路実篤の抽出しの中身～東京寄贈資料を中心に」第一部	平成13年4月	実篤が晩年の20年を過ごした仙川の家に残された資料は、幅広く内容豊で、近代の文学や美術を知る上でも貴重。合計1500点に及ぶ膨大で多岐にわたる実篤旧蔵資料の全体像を紹介。仙川時代の作品や、愛蔵品、白樺同人はもとより谷崎潤一郎、三島由紀夫、周作人、安田靫彦、熊谷守一はじめ、白樺時代から晩年まで様々な分野の人々から寄せられた書簡な	本文30ページ／ 白黒24ページ、 カラー6ページ
M16	「描くということ」～白樺同人、絵画への軌跡～	平成14年4月	白樺同人が学習院に学んだ明治中・後期の美術教育は、お手本を模写する臨画教育が中心だった。白樺同人の学習院時代の課題画を出発点として、有島生馬、里見弴、児島喜久雄、志賀直哉、長与善郎、実篤が、学校卒業後絵を描くことから離れた者も、後年絵画制作へ向かい、どのように自らの絵画を獲得していったかを資料と作品から検証し、描くことの意味を探る。	本文22ページ／ 白黒12ページ、 カラー10ページ